

氏名	かわい ま すみ 河合真澄
学位(専攻分野)	博士(文学)
学位記番号	論文博第411号
学位授与の日付	平成13年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文題目	近世文学の交流——演劇と小説——

(主査)
論文調査委員 教授 日野龍夫 教授 木田章義 助教授 大谷雅夫

論文内容の要旨

本論文は、交流を主題として、日本の近世文学のうち、演劇ならびに小説について考察したものである。浄瑠璃と歌舞伎、すなわち演劇の分野の内部における交流と、分野を越えた演劇と小説との交流を論じ、対比されるそれぞれが相互に大きな影響を及ぼし合っている状況を明らかにすることを意図し、とくに、歌舞伎の脚本である台帳にもとづく考察を主眼としている。

第一部では、近世を代表する二つの演劇である歌舞伎と浄瑠璃の交流について、歌舞伎の台帳の検討を中心に論ずる。

第一章では、京都大学附属図書館蔵の享保年間の歌舞伎台帳『俊徳丸児手柏』を取り上げている。これは天下の孤本であり、従来紹介されていない資料である。歌舞伎における享保期を、役者の位付の考察によって特定した後、この台帳の内容から、実悪の台頭・やつしの衰退・道外の変化の三点を指摘して、歌舞伎における享保期の意義を解明した。

第二章でも、同じく享保期の歌舞伎であり、京都大学附属図書館蔵に所蔵される孤本の台帳『熊野御前平紋日』を取り上げ、この狂言に浄瑠璃『平家女護島』がいかなる方法で取り入れられているかを、二段目鬼界が島の段に注目して考察している。そこから、当期の歌舞伎は、その劇形態にふさわしい改変は加えるものの、浄瑠璃を忠実に取り入れていることを指摘した。

第三章では、合作浄瑠璃の代表作『義経千本桜』に先行作『苺萱桑門筑紫鞆』の利用が見られることに着目し、両者の詞章を細部にわたって比較・検討することにより、『義経千本桜』の立作者は、『苺萱桑門筑紫鞆』の立作者並木宗輔であったと推定した。立作者の推定は、最盛期の浄瑠璃研究の端緒となるものであるが、研究成果に乏しく、この論では、それに一定の解決を見出している。

第四章では、宝暦から安永に至る歌舞伎の大成期には、それまでは浄瑠璃を忠実に取り入れていた歌舞伎が、徐々に浄瑠璃を消化して、「はめ物」という換骨奪胎の手法が取られるようになったことを論じ、また一方では、舞台機構の大改革がおこなわれて、この時期に歌舞伎が浄瑠璃より優位に立ったことを、实例にもとづいて明らかにした。

第五章では、宝暦期の歌舞伎台帳『銀閣寺新始』を取り上げ、その立作者である竹田治蔵の閲歴を番付や劇書の記事から確認し、初世並木正三と比肩する大作者であったことを指摘している。また、この台帳に浄瑠璃『けいせい反魂香』が摂取されている部分を抽出・検討し、「はめ物」による宝暦期歌舞伎の浄瑠璃摂取の実態を解明した。

第六章も、同じく竹田治蔵の作である宝暦期の歌舞伎『仮名草紙国性爺実録』について、台帳にもとづいて論じている。この作は浄瑠璃『国性爺合戦』を粉本としたものであり、両者の類似部分を詳細に比較して「はめ物」の実態を確認し、さらに、この二作品だけではなく、多くの浄瑠璃・歌舞伎作品が複雑に相互摂取している状況を明確にした。

第七章でも、竹田治蔵の作である歌舞伎『秋葉権現廻船語』を例に取り、その台帳に見られる近松半二などの浄瑠璃から影響を受けた部分を検討し、この作が「はめ物」という手法の到達点を示していることを解明した。また、逆にこの作から浄瑠璃に取り込まれた趣向を指摘し、宝暦期に歌舞伎が浄瑠璃に対する優位を取り戻したことを証明した。

第八章は、浄瑠璃から歌舞伎へ、さらに歌舞伎から浄瑠璃へという趣向の利用の流れをたどり、浄瑠璃『妹背山婦女庭

訓』の登場人物であるお三輪の役柄形成には、浄瑠璃の三大名作とされる『菅原伝授手習鑑』『義経千本桜』『仮名手本忠臣蔵』などの影響が見られることを指摘した。これは同時に、歌舞伎と浄瑠璃の興亡の推移を証明したものである。

第九章では、安永期の歌舞伎『伊賀越乗掛合羽』について、台帳にもとづいて考察している。この狂言には、浄瑠璃『仮名手本忠臣蔵』を利用した部分が見られることが、従来指摘されていたが、この論では、それが全編にわたって見られることを詳細に述べ、忠臣蔵の世界が、他の敵討狂言をも取り入れ、伊賀越の世界をも巻き込んで膨んで行ったことを実証した。

第十章も『伊賀越乗掛合羽』について論じたものである。出版が数少なかったため、これまで認定されていなかった狂言読本という資料の概念を規定した。さらに、狂言読本の内容と台帳や役者評判記の記事との比較によって、上演実態を反映している貴重な資料であることを明らかにし、役者評判記作成の参考とされた可能性をも指摘した。

第二部では、役者評判記の開口部に西鶴の浮世草子の利用が多く見られることに着目して、演劇と小説（浮世草子）との交流を考察している。

第十一章では、役者評判記の開口部に見られる西鶴の浮世草子の利用部分を具体的に指摘し、そこから役者評判記の定型が成立した時期を推定した。また、評判記作者であった江島其磧の作文の特徴を見定め、さらに、其磧が西鶴の文章を書き換えている部分を手掛りとして、従来十分な解釈の得られていない西鶴作品中の難語のいくつかについて、新たな解釈試案を提示している。

第十二章では、役者評判記の作者が西鶴作品の類型に注目し、異なる西鶴作品の類型の部分再構成して開口部を作ったことを考察している。さらに、西鶴作品の類型に則った再構成という手法は、近世の評判記作者のみに留まらず、太宰治が西鶴作品を翻案紹介する際にも取られていて、近代にまで継承されていたことをも明確にした。

第十三章では、江島其磧の子である江島其跡が、父其磧の晩年に役者評判記開口部を代筆していた時期についての推定を試みている。父其磧の名を用いての代筆であったため、従来定かではなかった其跡の執筆時期を、開口部の作文・構成方法を子細に検討することによって、父其磧とは異質の特徴を備えた其跡の作を特定したものである。

第三部では、馬琴の読本『南総里見八犬伝』に見られる演劇的要素と、『八犬伝』の劇化をめぐる種々の資料とを検討し、演劇と小説（読本）との交流を考察している。

第十四章は、『南総里見八犬伝』に、浄瑠璃にもとづく趣向が数多く見られることを具体的に指摘し、『八犬伝』の登場人物には、その原形を浄瑠璃に求めたものが多く、典型的に描かれており、馬琴は演劇種を用いることを嫌忌しているかのように装いながら、実は読者が演劇種の趣向を察知することを予期していたこと等を論じている。

第十五章も、『南総里見八犬伝』が、全編にわたって多数の浄瑠璃や歌舞伎から趣向や人物像を借用していることを、具体的に作品名を挙げて指摘している。その結果、『八犬伝』の登場人物や場面展開は、単一の浄瑠璃や歌舞伎から想を得ているばかりではなく、複数の作品を組み合わせて成立していることを論証している。

第十六章でも、第十四章・第十五章を補足して、『南総里見八犬伝』の原拠となった浄瑠璃・歌舞伎の作品名を、さらに詳細に指摘している。それにより、『八犬伝』に取り入れられた浄瑠璃や歌舞伎は、細かな部分にしか過ぎない場合も多いが、元となった演劇作品を知ることが、『八犬伝』を読み解く手掛りとなることを述べている。第十七章は、『南総里見八犬伝』を歌舞伎化した作品である『花魁苔八総』の台帳を、原作と比較・検討した論である。『花魁苔八総』は、必ずしも原作に忠実な劇化ではなく、先行の歌舞伎・浄瑠璃を切りはめて作られたもので、利用されている先行作が『八犬伝』の演劇種を探る重要な手掛りとなること、『八犬伝』の挿絵が『花魁苔八総』に大きな影響を与えていること等を明確にした。

第十八章では、『花魁苔八総』のせりふ抜粋の形態を取っている書『花魁苔八総物まねぶたいことば』を翻刻・紹介している。台帳と比較することにより、この書は、実は『花魁苔八総』の内容を忠実に写した単純なせりふ抜粋ではなく、物真似の用に堪えるよう、せりふや人物を再構成した一個の新しい創作であることを解明している。

第十九章は、『花魁苔八総』と同じく『南総里見八犬伝』を歌舞伎化した作品である『けいせい八花魁』の「役者物まねぶたいことば」を含む三種の上方物真似本の翻刻・紹介である。これらには物真似本としての潤色があり、実際の歌舞伎狂言とは内容に径庭があるが、他の資料が現存しない狂言を推測する手掛りとなることを述べている。

第二十章は、西沢一鳳著の劇書『伝奇作書』から、『南総里見八犬伝』を菅原の世界に置き換えた未上演の歌舞伎狂言に関する記事を取り上げ、検討したものである。特殊な用語に解説を加え、『八犬伝』を菅原の世界に配した一鳳作の奇抜な

歌舞伎化案があったこと、ならびに、それが上演に至らなかった経緯を明確にした。

さらに、付論の十編では、小説の中から推測される歌舞伎の演出の実態、演劇関係の特殊な用語、歌舞伎・浄瑠璃の先行作・後続作との関係など、歌舞伎・浄瑠璃に関する細かな話柄を取り上げ、第一部から第三部までの補足としたものである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、歌舞伎を主として取り上げるが、視点は歌舞伎の世界に限られず、論題に「交流」とあるように、浄瑠璃と歌舞伎、あるいは浄瑠璃・歌舞伎と小説（浮世草子・読本）間の影響関係、また浄瑠璃・歌舞伎それぞれの分野内における先行作品の後続作品への影響などを幅広く考察した研究である。歌舞伎の研究は、議論の基礎となる台本の不備（残存状況の悪さ、上演ごとの改訂の様相の不明瞭さ）や、役者評判記・番付などの関連資料を通してなされる役者の動向・芸風などの検討の煩雑さゆえに、歌舞伎内部の研究に追われがちで、小説との対比ばかりでなく、おなじ演劇に属する浄瑠璃との対比さえも十分にはなされていないというのが現状である。

本論文は、歌舞伎研究として、資料の吟味などの点で十分な実証性を保ちつつ、浄瑠璃や小説との対比において多くの新見を提示しており、近世の演劇・小説の研究に寄与するところが大きい。

内容は、浄瑠璃と歌舞伎を扱った第一部、浮世草子と歌舞伎を扱った第二部、読本と歌舞伎を扱った第三部に分かれ、各部が数章ずつ、全体で二十章から成る。

本論文の特長のよくうかがえるくぐりとして、第一部第四～七章を挙げてみる。歌舞伎は元禄期の繁栄を過ぎて、十八世紀前半に一時衰えるが、十八世紀後半の宝暦期から再び隆盛に向かう。歌舞伎の復活の理由の一つは、十八世紀中期、延享・寛延頃に全盛期を迎え、数々の名作を生み出した浄瑠璃から趣向を借用し、巧みに換骨奪胎することによって、それまでの歌舞伎には見出せない刺激的な興趣を盛り込むことに成功した作劇法にあった。この手法は近世当時から「はめ物」と称される。論者は第四～七章において、十八世紀後半の上方の代表的な歌舞伎作者、並木正三と竹田治蔵の幾つかの作品について、「はめ物」の様相を詳細に指摘した。「はめ物」は、部分的な趣向は浄瑠璃から借りても、全体の筋立て、人物関係、前後の状況などは歌舞伎風に独自に設定されていることが多いので、それと指摘することも容易でなく、また一つの場面に複数の浄瑠璃が重複してはめ込まれていることもあり、趣向を提供している浄瑠璃の側にも原作・改作の別があることがあって、その様相は単純ではない。論者が正三・治蔵の歌舞伎と先行の多くの浄瑠璃を丹念に対比し、手際よく整理することによって、「はめ物」の具体相を明快にときほぐしたことは、元禄期や文化文政期に比してやや不振の宝暦期の歌舞伎研究にとって、大きな成果である。

次に第三部第十四～十六章について見てみる。この三章は、近世小説のうちもっとも長大な作品である曲亭馬琴の『南総里見八犬伝』が浄瑠璃・歌舞伎をどのように摂取しているかを考察する。『八犬伝』に演劇の影響が見られることはすでに知られており、幾つかの指摘もなされているが、本論文は、虱潰しと評しても過言でないほど徹底的に演劇の典拠を洗い出している。典拠は、趣向、描写、措辞などさまざまな面にわたっているので、これを遺漏なく指摘するためには、『八犬伝』と多くの演劇作品の、込み入った筋立てや複雑な人物関係、文章が、隅々まで頭に入っていなければならないが、論者は驚嘆すべき克明さをもってそれを成し遂げた。この調査によって、たとえば『八犬伝』の世界とはおよそ縁遠い純然たる世話浄瑠璃の『艶姿女舞衣』や、馬琴と同時代の鶴屋南北の歌舞伎『桜姫東文章』などまでもが『八犬伝』に摂取されていることが、初めて明らかにされた。

論者の考察は、個別的な例の指摘の丹念さに比して、それらを総合して作品の新しい解釈を提示するという点においてやや手薄であるという批評を免れがたい点がある。しかしそれは、本論文の成果を踏まえて、論者を含む近世演劇の研究者たちによって今後なされるべき新しい研究であり、本論文が、今後の研究の手がかりとしては十分な新見を数多く提示していることは疑いない。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2001年2月9日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。